

# 栗林公園の歴史

## 1. 栗林公園の沿革

栗林公園の起こりは、16世紀後半、元龜天正の頃、当地の豪族佐藤氏によって、西南地区（小普陀付近）に築庭されたのに始まるといわれ、寛永年間（1630年代）に、当時の讃岐国領主・生駒高俊（たかとし）公によって南湖一帯が造園され、現在の公園の原型が形作られました。

その後、寛永19年（1642年）生駒氏の転封に伴い入封した初代高松藩主・松平頼重（よりしげ）公（水戸光圀公の兄君）に引き継がれ、さらに100年以上経た延享2年（1745年）、5代頼恭（よりたか）公の時に、園内六十景の命名をもって完成しました。以来歴代藩主が修築を重ね、明治維新に至るまでの228年間、松平家11代の下屋敷として使用されました。

明治4年（1871年）高松藩が廃せられ、新政府の所有となり、明治6年1月公布された「公園に関する太政官布告」に基づいて明治8年（1875年）3月16日に県立公園として一般に公開されるようになり、さらに昭和28年3月には、文化財保護法による「特別名勝」に指定され、今日に至っています。

## 2. 歴史を巡る

### ■ 築庭の起源

かつてここには、香東川の東の流れ（西の流れは現在も残るもの）がありました。東の流れは、現在の高松中心部（高松城や市街地）へ流れ、頻繁に氾濫を起していたため、この流れをせき止める治水工事を行いました。

この工事を行ったのが、生駒高俊が藩主を務めていた寛永8年（1631）年頃に、仕えていた西嶋八兵衛です。

その結果としてできた大きな水たまりや伏流水などを利用して、栗林公園の庭づくりは始められたとされています。



西嶋八兵衛



## ■ 栗林荘から栗林公園に至るまで

栗林公園は、室町時代に生駒家に仕えた佐藤志摩介道益が隠居して当地の西南地区（小普陀付近）に築庭したのが発祥とされています。

それが後に讃岐高松藩主となった松平家の別邸、すなわち栗林荘として拡大整備されたのです。

そして明治維新を経て、大名庭園・栗林荘が松平家の手を離れた後、明治8（1875）年、県立公園として公開されたことから現在の“栗林公園”と変わりました。



栗林公園  
（旧栗林荘）

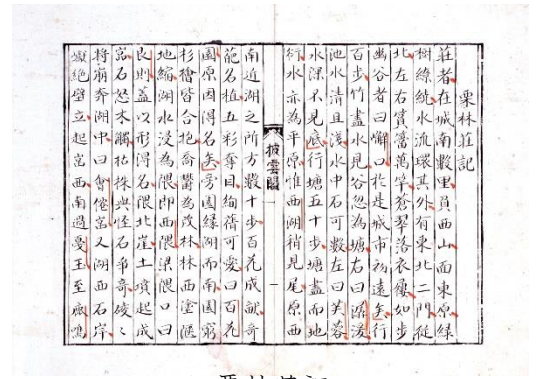
高松城  
（旧玉藻城）

## ■ 松平家歴代による栗林荘の整備

栗林荘が大名庭園として本格的に整備されたのは、高松松平家の時代になってからです。栗林荘の築庭は、豊臣秀吉の時代から讃岐国を治めた生駒氏によるともいわれますが、その頃の様子をはっきりと示す記録は、明確ではありません。

大規模の造園は、高松松平家の初代頼重（1622~1695）の時代にはじまります。生駒氏が御家騒動によって改易され、その後に高松城に入った初代頼重は、水戸徳川家の出身で、頼重に讃岐国高松12万石が与えられる際、将軍から西国・四国の目付を命じられたという記録が残っており、将軍家の親族大名として西日本の守りを託された存在でした。

主たる政務を次代の頼常（1652~1704）に譲った頼重は、自らの居所として栗林の地を選び、庭園として整備を行います。二代頼常の時代には、栗林荘の築庭が飢饉対策とされるなど庭園の範囲が広がられました。三代頼豊（1680~1735）は参勤交代で在国する際には、高松城ではなく栗林荘を居所とし、庭内の施設を充実させています。五代頼恭（1711~1771）も作庭に力を入れ、改修を施し、さらに1745年、藩の儒学者に命じて庭内の名勝に中国古典にちなんだ名前を付けさせ、これをもって栗林荘の完成としています。



栗林荘記

### コラム：茶の湯とのつながり

千利休から始まる千家の茶の湯の流れは、曾孫の代になり三流派（三千家）に分かれます。

松平家初代藩主頼重公は、高松藩初代茶道頭として、千利休の曾孫にあたる初代千宗守（一翁）を京都から招聘。一翁宗匠はここで3年近く茶道の指南役を担い、その後その職を辞して京都の武者小路で開祖したのが、三千家のひとつ武者小路千家です。別名を官休庵というのは、松平家の茶道頭（官職）を辞した後に開いたことに由来します。武者小路千家では、一翁宗匠以降も歴代家元は讃岐高松藩の茶道指南をつとめました。また、茶の湯に関係の深いお庭焼（理平焼）もこの場から生まれました。



旧日暮亭

### 3. 古図からみる栗林公園

#### ■御林御庭之図 元禄13年（1700）年

栗林荘を描いた絵図としては現在最古のものです。

図は西湖や涵翠池など紫雲山に接する一帯の水域がとても広く記されているのが特徴で、当時はまだ豊富な伏流水が湧き出るなど河川の名残があったものと推測されます。

また、すでに大茶屋（後の掬月亭）の姿も認められ、基本的な構成が完成していることがわかります。



#### コラム:初代藩主は黄門様の兄君!?

江戸時代初期、当時讃岐を治めていた生駒家がお家騒動により出羽へ転封になったあと、水戸徳川家初代頼房の長男（徳川家康の孫）である松平頼重公が、三代将軍家光から12万石を与えられて入封、高松藩が成立しました。

これより以降、栗林公園（当時は栗林荘と呼ばれていました）は松平家の別邸として使用され、歴代藩主によって修築が重ねられていきます。

なお、水戸徳川家は頼重の弟で、水戸黄門で知られる光圀が跡を継ぎましたが、光圀はその後継に頼重の子を迎え入れ、代わりに自身の子（頼常）を頼重の養子として高松藩を継がせました。

#### ■栗林図 弘化元年（1844）年

精密な絵図“栗林公園古図”

延享2年（1745年）に、中村文輔が“栗林荘記”を記した折、すなわち“栗林荘”として完成した時の姿を表しています。



■栗林分間図 文政7年（1824）年

当時の家老であった芦沢元徴が作製した初めての実測図“栗林分間図”。  
時代と共に作画手法は徐々に移り変わりますが、南庭はほぼ現在の姿と変わらず、北庭には檜御殿が表現されているのが特徴です。



■栗林公園 明治32年（1899）年

明治31年に再築された日暮亭、同32年に完成した県博物館（後の商工奨励館）が見て取れます。



■ 讃岐高松栗林公園真景 明治37年（1904）年

初版の公園案内図です。江戸時代の大名庭園から、公園として一般公開され誰もが訪れることのできる場所となったことがわかります。



■ 栗林公園真景 大正年間

明治44年から着手されていた北庭の大改修が、大正2年に完成。この頃全国的に入ってきた洋風思想の影響から、運動場、芝生広場、大規模園路などを取り入れた構成となり、現在の北庭の姿となりました。



## 4. 年表

～栗林荘時代～

元号	西暦	事項	備考
応永の頃	1400頃	室町期の手法、仏教信仰の庭として小普陀の石組がつけられたと思われる。	
天正15年	1587	生駒親正が讃岐17万3千石を領する。	生駒親正
慶長元和の頃		生駒家に仕えた佐藤道益が隠居して、この地に庭園を営む。	一正・正俊
寛永2年	1625	伊勢国津藩藤堂家家臣、西嶋八兵衛が讃岐国生駒家に派遣される。	生駒高俊
寛永8年	1631	西嶋八兵衛は生駒家の命により、香東川の東の流れを堰き(その地に大禹謨を鎮む) 西の流れに統合した(1637年説あり)。生駒家は佐藤道益の庭をもとに香東川の河床に「栗林荘」を築いたが、八兵衛は土木主任としてこれに関与したとも推測される。	
寛永17年8月	1640	生駒高俊が出羽の矢島荘(秋田県)に転封される。	
寛永19年5月	1642	松平頼重が東讃岐12万石を領する。生駒家が築いた栗林荘を使用、改修に着手する。	松平初代頼重
延宝元年	1673	このころ、観音堂・檜御殿を建立する。	
元禄13年10月	1700	「御林御庭之図」完成。同図によれば、この時すでに掬月亭が描かれている。	松平2代頼常
延享2年4月	1745	栗林荘改修・完成。六十景撰名なる。「栗林荘記」書かれる。	松平5代頼恭
寛延元年	1748	薬草園を営み、平賀源内、池田玄丈、池田文泰などに管理させる。	
文政7年	1824	高松藩家老芦沢元徴「栗林分間図」を作成する。	松平9代頼恕
天保4年	1833	9代藩主頼恕、11代将軍家斉より五葉松の盆栽を拝領する。(後の根上り五葉松)	
弘化元年	1844	本園の精密な絵図が完成する。「栗林古図」	
嘉永3年	1850	鴨猟に支障があるとして北庭の栗の木を伐採。(3本のみとする。)	松平10代頼胤
明治2年	1869	版籍奉還により本園の敷地は官有(明治政府)となる。この頃、檜御殿、観音堂、弁財天祠、日暮亭、星斗館(掬月亭)の一部などを廃す。	

### コラム: 日本最大の鴨場

北庭の群鴨池は、歴代藩主が鴨猟をするための鴨場でした。明治から大正にかけての北庭改修工事で当時の鴨場施設はなくなりましたが、1993年遺構をもとに鴨引き堀を復元しました。現代では、鴨引き場が残る鴨場は、全国で5箇所しか残っていませんが、復元された鴨引き堀は、幅、長さとも現存する鴨場の中で最大です。鴨猟は鴨の習性を利用したもので、鷹匠も参加する大掛かりなものだったようです。



鴨引き堀

～栗林公園時代～

元号	西暦	事項
明治8年3月	1875	「公園に関する太政官布告」に基づき栗林公園が県立公園として一般公開される。この頃、有志が「甘棠社(かんとうしゃ)」を組織し、本園の維持に協力する。
明治13年3月	1880	栗林公園碑東門に建立。(明治11年製作着手)
明治30年5月	1897	公園用地として紫雲山の使用が許可される。(農商務省)
明治31年1月	1898	日暮亭が建築される。(石州流)
明治32年2月	1899	香川県博物館(現商工奨励館)が完成、3月開館する(帝室技芸員伊藤平左衛門設計・監理)。明治39年「物産陳列所」、大正10年「商品陳列所」、昭和13年「商工奨励館」に改称し現在に至る。
明治36年10月	1903	皇太子殿下(大正天皇陛下)星斗館にご滞在。松をお手植えされる。(10月10日～14日)
大正2年4月	1913	北庭の改修が完成する。(明治44着手)。(宮内省内苑寮技師市川之雄設計・指導。)
大正3年3月	1914	皇太子殿下(昭和天皇陛下)、淳宮殿下(秩父宮殿下)、光宮殿下(高松宮殿下)が御来園。それぞれ松をお手植えされる。
大正11年3月	1922	「名勝」に指定される。(史蹟名勝天然紀念物保存法)
昭和5年1月	1930	(財)栗林公園動物園が開設される。
昭和20年5月	1945	園外に移築されていた日暮亭を園内にもどして復元し、新日暮亭と称す。
昭和20年7月	1945	空襲により紫明亭、枕流亭、北門詰所などを焼失する。
昭和24年11月	1949	高松市立美術館が開館する。
昭和28年3月	1953	「特別名勝」に指定される。(文化財保護法)
昭和31年8月	1956	公園の整備・保全などを強化するため入園が有料となる。(大人10円、小人5円)
昭和37年4月	1962	根上り檜、ソテツの岡、モガシ(ホルトの木)が県天然記念物に指定される。
昭和37年7月	1962	香川県香川町大野にあった「大禹謨」石碑を商工奨励館中庭に移す。
昭和39年3月	1964	石壁(赤壁)の発掘を完了する。(土砂、灌木などにより埋没していた)
昭和40年3月	1965	掬月亭保存修理工事を完了する。(伊藤要太郎設計・監理、昭和37年9月着手)
昭和40年3月	1965	讃岐民芸館(古民芸館)開館(旧民芸館の土蔵2棟を改造)
昭和41年4月	1966	昭和天皇陛下、皇后両陛下御来園。(四国行幸啓)
昭和42年7月	1967	桶樋滝を復元する。
昭和42年7月	1967	新民芸館開館。(事務所を改造)
昭和45年5月	1970	各池の改修(底打ち、護岸)工事を完了する(昭和38年着手)。群鴨池に花菖蒲園新設。
昭和50年3月	1975	開園100周年記念行事開催。
昭和63年2月	1988	高松市立美術館が園外に移転する。
平成3年8月	1991	皇太子殿下御来園。
平成5年5月	1993	鴨場復元工事を完了する。(昭和63年移転した美術館の跡地整備として)
平成5年7月	1993	掬月亭保存修理工事を完了する。(平成4年8月着手)
平成5年10月	1993	今上天皇陛下御来園。(東四国国体)
平成13年3月	2001	偃月橋改修工事を完了する。(平成12年11月着手)
平成16年3月	2004	栗林公園動物園が閉園する。
平成18年10月	2006	東門周辺整備(栗林公園動物園跡地の整備)が完了し、東門駐車場を供用開始する。
平成23年10月	2011	新日暮亭を旧日暮亭に改名、大茶会で改名式を催す。
平成24年7月	2012	南湖において和船「千秋丸」の運航を開始する。
平成25年3月	2013	栗林庵(かがわ物産館)オープン。
平成25年11月	2013	北庭完成100周年、特別名勝指定60周年記念事業開催。
平成27年8月	2015	商工奨励館リニューアルオープン。(平成26年1月着手)
平成28年4月	2016	G7(情報大臣サミット)開催時の会場の一部として商工奨励館が利用される。
平成28年	2016	瀬戸内国際芸術祭2016の会場として「讃岐の晩餐会」、「東京藝大の作品展示」を行う。

5. 写真でみる栗林公園  
～明治から昭和にかけて～



紫雲山から掬月亭を望む | 推定明治時代



紫雲山から玉藻城 | 推定明治時代



明治から大正時代頃～南湖



明治から大正時代頃～偃月橋



明治から大正時代頃～芙蓉沼



明治から大正時代頃～北門（櫺口御門）





明治から大正時代頃～梅林橋と北湖



明治から大正時代頃～掬月亭



明治から大正時代頃～商工奨励館



明治から大正時代頃～北湖



昭和中期の航空写真～東門附近



昭和中期の航空写真～全景